

[研究ノート]

『日はまた昇る』におけるイデオロギー

光 富 省 吾*

序

アーネスト・ヘミングウェイは 1920 年代にヨーロッパに暮らしながらも、アメリカ人としてのアイデンティティの追求を怠ることがなかった。言い換えれば、アメリカ、フランス、スペイン、イタリアなどの文化領域を自由に越境し、複眼的思考のできる一種のコスモポリタンであった。フランスとスペインを舞台にアメリカとイギリスの国籍離脱者が主たる登場人物になっている『日はまた昇る (The Sun Also Rises)』に流れる様々なイデオロギーを検証し、ヘミングウェイの政治意識について考察する。

I 人種／民族

19 世紀末から東欧・南欧からのいわゆる新移民が流入して来て、都市部に住みつき、20 世紀初頭のアメリカは大きく変貌しようとしていた。アメリカの主流派であった白人プロテスタントは、旧来の価値観を維持するために法律

* 福岡大学人文学部

を制定して、移民制限などを行おうとしていた。また19世紀後半の奴隷解放によっても、黒人は自由になったとはいえ、人種問題はアメリカ社会の火種となっていた。『日はまた昇る』の舞台はフランスとスペインであるが、語り手のアメリカ人ジェイク・バーズはアメリカに距離を置く国籍離脱者であるために、逆説的な言い方になるが、アメリカ国内からは見えにくいアメリカの姿がヨーロッパから映し出されていると考えられる。アメリカ国内の人種／民族問題はこの作品にどのように映し出されているのかを検討してみる。

(1)ユダヤ人

小説の冒頭は次のようにユダヤ人ロバート・コーンの紹介の形で始まる。ただしコーンがジェイクに欠けているもの（裕福なユダヤ系出身であることとブレットと肉体関係をもつことができる「健全な」身体）を持っていることから生じる嫉妬心のせいで、コーンに関する語りは多少、意地悪あるいは辛辣になる傾向が見られることは最初にお断りしておかなければならない。

Robert Cohn was once middleweight boxing champion of Princeton. Do not think that I am very much impressed by that as a boxing title, but it meant a lot to Cohn. He cared nothing for boxing, in fact he disliked it, but he learned it painfully and thoroughly to counteract the feeling of inferiority and shyness he had felt on being treated as a Jew at Princeton. There was a certain inner comfort in knowing he could knock down anybody who was snooty to him, although, being very shy and a thoroughly nice boy, he never fought except in the gym. He was Spider Kelly's star pupil. Spider Kelly taught all his young gentlemen to box like featherweights, no matter whether they weighed one hundred and five or two hundred and five pounds. But it seemed to fit Cohn. He was

really very fast. He was so good that Spider promptly overmatched him and got his nose permanently flattened. This increased Cohn's distaste for boxing, but it gave him a certain satisfaction of some strange sort, and it certainly improved his nose. In his last year at Princeton he read too much and took to wearing spectacles. I never met any one of his class who remembered him. They did not even remember that he was middleweight boxing champion. (*The Sun Also Rises* 3-4)

まずロバート・コーンがユダヤ人で、アメリカ社会で人種差別を受けていたことが語られる。特にアイヴィー・リーグの名門プリンストン大学で差別が行われていたことが明らかになる。さらにコーンが眼鏡をかけるようになったことは、ユダヤ人が勤勉であるという特性を映し出している。ジェイクが語るように、佐藤唯行は20世紀初頭のアメリカの大学でユダヤ人に対する差別が存在したことを認めている。ユダヤ人の勤勉な学生気質が、学業よりもスポーツマンシップとリーダーシップ養成に重点を置く従来の大学にそぐわないために、1910年代から20年代にかけて多くの高等教育機関が特定の人種/民族・宗教的マイノリティ（その中でも特にユダヤ人をターゲットにした）の学生の入学を制限するクォータ・システムを導入したと、佐藤は述べている（佐藤『迫害史』154-159）。アングロ・サクソン中心の大学でユダヤ系が学力でリードして行くのは、これまでのアメリカの支配者層にとって脅威であったことは容易に想像出来る。近年アジア系の大学進学率が高まることによって、これと同様の問題がアメリカ社会では起きている。

ユダヤ人コーンに対する批判のうちで、その知的優位性に対する批判はより顕著である。たとえばブレットとマイクが来ないと予想するコーンの話し方に見られる「知的優越感 (superior knowledge)」(*The Sun Also Rises* 95) に対してビルとジェイクは苛立つ。これはコーンがブレットと一度性的関係を持っ

たことで、誰よりもブレットのことがわかっているとひけらかしたためである。ビルはこれをコーン個人に特有の性質と考えず、ユダヤ人に一般的に見られる性質と考えているらしく、"Well, let him not get superior and Jewish" (*The Sun Also Rises* 96) とコーンの優越感をユダヤの特性と関連付けて捉えている。たとえば闘牛見物にスペインまで出かけていながら、素直に闘牛を楽しめず退屈しているコーンを、ビルはユダヤ人に多く見られる知的優越感と結びつけて、"That Cohn gets me,... He's got this Jewish superiority so strong that he thinks the only emotion he'll get out of the fight will be being bored" (*The Sun Also Rises* 162) と批判する。知的分野において、偉大な業績を残したユダヤ人は多いので、ユダヤ人が知的に優れているという考え方が広がっていたことを窺わせる。長期間に亘る迫害と差別によって定住の場所を持たず離散と移動を強いられてきたユダヤ人は財産を持ち運びやすい金に換え、さらに決して奪われることのない「知識」を重視してきた。その結果、金融業に幅広く進出し、学問の分野でも大きな業績を残すことができた。1920年代においてもすでにマルクス、フロイト、アインシュタインらは20世紀の社会を大きく動かす知的業績を残していた。

優生学を利用して、アングロサクソンの優位性を強調する動きは、逆にユダヤ人の知的優位性が世界に蔓延することを怖れて、逆に遺伝子のレベルで否定しようとする動きとも考えられる。反ユダヤ主義を明確に打ち出したヒトラーの『わが闘争』が出版されたのも1925年（第一巻）と1926年（第二巻）であった。

コーンはユダヤ人としての劣等感を克服する、言い換えれば、気に入らない人間はいつでも殴ってやることのできるためにボクシングを始めたのだが、ボクシングそのものは好きではない。しかし、コーンよりも体重が重い階級の選手と練習したせいで、鼻がつぶれ、ユダヤ人らしい鉤鼻の形が崩れて、その結果ユダヤ人らしい外見を失うことで、逆に奇妙な満足感を得ている。

ジェイクは最初にボクシング・タイトルなんて自分にはたいした意味を持たないが、コーンにとっては大きな意味があると語っている。後述するように、経済的に裕福ではあっても人種的にはマイノリティであるユダヤ人コーンにとっては、ある種の威厳や権力を保障するタイトルには大きな意味があるということである。タイトルの問題については貴族のタイトル（爵位）とあわせて後述する。

ユダヤ人としての被害者意識が強いコーンではあるが、次に見られるように、それは行動や態度にも表れているようである。

He looked a great deal as his compatriot must have looked when he saw the promised land. Cohn, of course, was much younger. But he had that look of eager, deserving expectation. (*The Sun Also Rises* 22)

ここには約束の地エルサレムを見るユダヤ人のイメージがある。コーンのわざとらしい受難者気取りのポーズに対するジェイクの批判も読み取れる。ブレットも "I hate his damned suffering" (*The Sun Also Rises* 182) と語り、コーンの受難者的ポーズには批判的である。

次にユダヤ人コーンのバックグラウンドに触れておきたい。ジェイクはコーンの出自を次のように語る。

Robert Cohn was a member, through his father, of one of the richest Jewish families in New York, and through his mother of one of the oldest. (*The Sun Also Rises* 4)

コーンがアメリカ経済の中心地ニューヨークの裕福なユダヤ系出身であるのに対し、ジェイクは、カンザス・シティという中西部の市の出身で、（詳しくは

語られていないのであくまでも推測であるが) 確固たるバックグラウンドを持たない。このようなジェイクから見れば、コーンは金持ちの世間知らずの坊ちゃんに見えるのであろう。

アメリカにおけるユダヤ人といっても様々であり、コーンがどのユダヤ人に属するかを見るために、ここでアメリカのユダヤ人の歴史に触れておくのも無駄ではないだろう。

1654年に上陸したスペイン／ポルトガル系のユダヤ人がアメリカに入国した最初のユダヤ人であった(佐藤『迫害史』24)。次に19世紀中ごろから1880年にかけて、ドイツ系ユダヤ人が入国してくる。これらの移民の中にはすでにヨーロッパで金融業の分野で成功を収めていた人も多かった。アメリカでは小売商店主や卸売商として成功し、さらに銀行や百貨店の経営者となるものも出て来た(佐藤『迫害史』27-28)。最後に、ポグロムのようなユダヤ人迫害を逃れて東欧から多くの貧しいユダヤ人が、19世紀末から20世紀初頭にかけて移動して来た(佐藤『迫害史』30)。ミュージカルや映画として著名な『屋根の上のヴァイオリン弾き』は、ポグロムに追われるロシア系ユダヤ人がアメリカへ移民するまでの姿を描いている。明確に書かれているわけではないが、コーンは金融業の分野などで成功した2番目のグループの子孫に属していると考えられる。

ユダヤ人が迫害・差別されてきた理由として、まず、西洋社会では、少なくともキリスト教徒の間では、キリストを殺したのがユダヤ人であると信じられていることが挙げられる。さらに、アメリカにおける資本主義社会の発展に伴い、ユダヤ人資本家も進出していった。佐藤によると、特に投資銀行の分野には、クーン・ローブ社、J&W・セリグマン社、スペイヤー社、ソールマン社、リーマン・ブラザーズ社、ゴールドマン・サックス社などのユダヤ系の資本が集中した(佐藤『経済力』26-27)。これらのユダヤ人はヨーロッパにいるユダヤ人とのネットワークも強固なもので、次第に国際金融市場を動かす力をつけ

ていった。次第に経済力を増大して来た（キリスト教徒にとっての）異教徒のユダヤ人は WASP にとっては脅威となったこともユダヤ人差別の理由となった。当時の歴史的文脈からこの作品を読み直したマイケル・レイノルズも "Cohn belonged to the Jewish establishment, which many thought to be a threat to the American way of life" (Reynolds 53) と述べている。

ユダヤ人の金融分野における進出は大きなものであったようで、（これはイギリスのことであるが）マイクは、ブレットの収入を搾取する高利貸しはすべてユダヤ人としている。もっともマイクは、高利貸しはすべてユダヤ人であると決め付けることに罪悪感を感じていて、その後素直に、その高利貸しはスコットランド人である可能性もあると自分の偏見を認めている (*The Sun Also Rises* 230)。ユダヤ人の金融支配は欧米社会では当然のこのように受け入れられていたことがわかる。

アメリカの人口で、ユダヤ人が占める割合は2%程度で、それほど大きなものではないだろう。しかし、富豪と呼べるユダヤ人の経済的成功者の割合は約40%で、人口の割合をはるかに凌いでいる。確かにロスチャイルド、グッゲンハイム、オッペンハイマー、ローゼンウォルドなどユダヤ人の経済支配者が多いのは事実である。しかし一方でアメリカ経済を牛耳っていた経済的支配者に、非ユダヤ系のロックフェラー、フォード、ヴァンダービルト、モーガン（モルガン）、ウルワースなども挙げられ、ユダヤ資本が絶対的な力を持っていたわけではないことも事実である。ユダヤ人に一般に「金に汚い」というイメージが付きまとっているが、ヴァンダービルト財閥の創始者コーネリアス・ヴァンダービルトも、「アメリカ陸軍の輸送にかかわる利権をもとに、伝説によれば賄賂などの不法な手段を駆使して蒸気船と鉄道的一大帝国を築いた」（広瀬 22）と言われており、「金に汚い」のはユダヤ人に限らないのである。19世紀初頭の資本主義社会の成立で、いわゆる「金びかの時代」から、アメリカに拝金主義がはびこった。確かにユダヤ系の進出が顕著であるとはいえ、アメリカ

の経済界を支配していたのは決してユダヤ系だけではないのにもかかわらず、ユダヤ人が経済を支配しているように思わせているのは、ユダヤ系以外の資本家が自分たちの拝金主義を正当化するために、従来から「金に汚い」というイメージがあるユダヤ人をスケープゴートにしたと考えられる。『日はまた昇る』を読めば、ジェイク、ブレット、マイク、ビルらは、このようなイデオロギーに、程度の差こそあれ、汚染されていたのは明らかである。

(2)黒人

フランスとスペインを舞台としたこの小説では、アメリカ国内の黒人差別問題が見え難いのは確かであるが、ヘミングウェイが人種差別の問題を微妙な形で提示しているのも事実である。スヴォボダは、ゼリの店に出て来る黒人ドラマーのモデルは、アフリカ系であると同時にネイティブ・アメリカンの血も引くユージーン・ジャク・ブラードであると、そのモデルを特定している。スヴォボダによると、ブラードは1894年ジョージア州コロンバスで生まれていて(Svoboda 105)、ブラードの父親が、フランスでは、黒人も白人と同様に扱われると伝えた(Svoboda 105-106)とあるように、ブラードが渡欧した理由はアメリカ国内における人種差別である。作品中で歌われる曲名も特定されている¹が、歌詞の大半は白人ブレットと黒人の人種を超えた性的関係を示唆するという理由で、マックスウェル・パーキンズが削除したと言われている。²物語中で「恋多き」女性としてブレットが描かれているために、パーキンズは人種によって引き起こされる余計な問題（異人種間における性的関係）を排除しなかったのであると推測される。

ドラマーのモデル、ブラードは奴隷解放後も、そして20世紀に入っても終わらない人種差別に対抗して、アメリカでは実現できない自己実現をめざしてヨーロッパに渡ったと考えられる。20世紀初頭（特にハーレム・ルネッサンスと呼ばれる1920年代）は、黒人の意識が向上していた時代で、W・E・B・

デュボイス、マーカス・ガーヴェイ、チャールズ・S・ジョンソンらの指導者が黒人の自立を促した。このような時代にブラードはアメリカでは不可能なことがヨーロッパでは可能であると信じて、渡欧したと考えられる。実際ブラードはフランス空軍では平等に扱われたが、アメリカ陸軍では人種差別されたことを認めている（Svoboda 107）。

ブラードはボクサーでもあったが、戦傷のためその道を断念し、ドラマーとなるために音楽のレッスンを受けて、ドラマーとなった。そして1922年ゼリの店でジャズバンドのリーダーとなった。³その後ボクサーとして復帰をはかる。スヴォボダによると、ビル・ゴートンが見たウィーンのボクシングの八百長試合と同じような試合をブラードは行ったこともあるようである（Svoboda 108）。パリにいるアメリカの黒人をどう解釈するかは人によって異なるであろうが、現在のように国と国の移動が容易ではない1920年代の状況を考えれば、このドラマーが特別にパリに滞在していることをアメリカの人種差別を逃れて来たとみなすのはそれほど不自然なことではないだろう。

(3) バスク人

バスク問題はスペインとフランスの問題であり、アメリカとは無関係である。しかし、ある国における民族と民族の力（支配）関係という点で、ネイティブ・アメリカンの問題と相通ずるものがあり、ここで触れておく。

そもそもジェイクがスペインへの旅に出るのは、パリの喧騒に満ちた、近代化された生活を離れて、身体性の回復をはかるためである。1920年代のパリは、交通手段が馬車から自動車へ移行していたと首藤理彩子が指摘するように（首藤 3-7）、パリに限らず西欧の先進国では、近代化がよりいっそう進められていた時期なのである。機械化が進み、効率や利便性のみが安易に追求される生活を逃れて、ジェイクはスペインで釣りをし、近代合理主義から見れば全くの無駄としか見えない闘牛を含めた祝祭見物に出かけるのである。ブルゲーテ

への小旅行で、ジェイクとビルはバスク人と同じバスに乗り合わせ、意気投合し、酒を酌み交わす。バスク人はフランスとスペインにまたがるピレネー山脈西方に居住する民族で、インド・ヨーロッパ語族には属しない特殊な言語を使用し、人種的にも文化的にも独自のものを持っているが、長期間に亘るスペインとフランスの間で抑圧・支配に耐えかねて、1895年バスク国民党によって、バスク民族運動の機運が高まった。ジェイクとビルが旅した1925年はその運動が継続していた時期でもある。後にフランコ将軍によって、この運動は弾圧されることになる。このような政治的緊張感『日はまた昇る』には直接的に描き出されていないが、ヘミングウェイは読者がこのような背景を知識としてもっていることを想定した上で、作品を書いていることは忘れてはならないだろう。しかしスペインとフランス両国から抑圧されながらも、人間性を失っていないバスク人との接触によって、ジェイクは人間性を回復させて行くのだ。ヘミングウェイの文学では、これと類似した世界はネイティブ・アメリカンを描いた作品に見られる。白人に抑圧されながらも、文明化された人間が失った素朴さを保ち、大地との接触を失わない生き方はヘミングウェイにも、そしてその作品の登場人物にも大きな影響を及ぼしている。ネイティブ・アメリカンと同様に、後に触れるツルゲーネフの『獵人日記』に描き出されるロシアの農奴にも同じことがいえるだろう。

Ⅱ 階級

(1) タイトル (爵位とチャンピオンシップ)

深夜突然ブレットとミピポポラス伯爵がジェイクのアパートを訪ねて来る。伯爵は良質のシャンパンを作る知人が男爵であると語ったことから、次のように話題が爵位に移って行く。

"This fellow raises the grapes. He got thousands of acres of them."

"What's his name?" asked Brett. "Veuve Cliquot?"

"No," said the count. "Mumms. He's a baron."

"Isn't it wonderful," said Brett. "We all have titles. Why haven't you a title, Jake?"

"I assure you, sir," the count put his hand on my arm. "It never does a man any good. Most of the time it costs you money."

"Oh, I don't know. It's damned useful sometimes," Brett said.

"I've never known it to do me any good."

"You haven't used it properly. I've had hell's own amount of credit on mine." (*The Sun Also Rises* 56-57)

ブレットは爵位を持っていることを誇りに思い、その有用性を自慢する。それに対してミピポラスは爵位を持つことの苦勞を語る。貴族制度のないアメリカ生まれのジェイクは当然爵位をもっていないから、この会話に加わることはない。ピューリタン革命と名誉革命などの民主主義革命を経験しながら、一方で古い制度を維持するイギリス人と旧大陸では実現できない理想国家の建設を目指したアメリカ人の違いが出ているのであろうか。一方この時代はすでにオスマン・トルコ、ロシア、オーストリア・ハンガリーなどの帝国が次々と崩壊し、ロシアには新しく社会主義国家が成立した時代であることを忘れてはいけぬ。エチオピアの植民地戦争やロシアの農奴解放に対する言及で明らかのように、ジェイクは新しい時代の到来を意識していて、ジェイクは、従来の貴族制度に意味があるとするブレットとは必ずしも同じような思想を抱いているわけではない。

ところでブレットの爵位とは、婚約者のマイクによると、"baronet" (*The Sun Also Rises* 203) である。日本語では「準男爵」と訳されるようで、baron

の下で、knight の上にあたり、厳密な意味では貴族にあたらぬ。それでも何らかの威厳を人に与え、持っていればそれなりの効果はあるとブレットは信じている。コーンも、ボクシングのタイトルであれ、貴族のタイトルであれ、意味があると考えているのである。ビルやマイクと口論したあげく、侮辱された後のコーンの様子をジェイクは次のように語っている。

Cohn still was at the table. His face had the sallow, yellow look it got when he was insulted, but somehow he seemed to be enjoying it. The childish, drunken heroics of it. It was his affair with a lady of title. (*The Sun Also Rises* 178)

どんなに侮辱されても、それを楽しんでいるように見えるのも、コーンにとっては、それが「爵位を持つ女性」との情事であったからであり、ジェイクやビルらとの差別化をはかることができ、コーンに優越感を与えるからである。

ブレットとコーンには権威を与えるタイトルを有り難がる傾向が見られる。ジェイク自身は自分の気持ちを明らかにしていないが、ブレットとコーンほどにタイトルを重視する姿勢は見られない。

(2) 『獵人日記』と農奴解放

ジェイクは眠れない夜にツルゲーネフの『獵人日記』を読んで、農奴解放以前のロシアの田園風景に感銘を受けている。風景描写の巧みさに感動しているといえるし、ロシアの大地に根をはった農奴の姿に感銘を受けているとも解釈できる。

この作品が若き日のヘミングウェイに大きな感銘を与えたのは間違いない。『日はまた昇る』だけでなく、『移動祝祭日』においても、『獵人日記』に魅了されたことを回想している。パリで作家として修行していた時代に、シルヴィ

ア・ビーチのシェイクスピア・アンド・カンパニー書店で、ヘミングウェイはD・H・ロレンスの『息子と恋人たち』、トルストイの『戦争と平和』、ドストエフスキーの『賭博者とその他の物語』と一緒にツルゲーネフの『獵人日記』を借り出したという（*A Moveable Feast* 36）。さらに、シルヴィア・ビーチの店で、ツルゲーネフの本は全部読んだとも回想している（*A Moveable Feast* 133）。特にツルゲーネフの作品で感銘を受けたのは、風景や道路の描写に真実性があるということだ（*A Moveable Feast* 133）。ジェイクは "The country became very clear..." (*The Sun Also Rises* 147) と語っていることから、ツルゲーネフの写実的な自然描写に感銘を受けたと思われる。『獵人日記』では、名前のないロシア貴族の男性がロシアの大地を狩猟したり、釣りをしたりしながら、農奴に出会ったり、牧草地で眠ったりするのだ。これと似た場面をヘミングウェイのいくつかの短篇に見ることができる。

マイラー・ウィルキンソンはヘミングウェイとツルゲーネフの関係を克明に追っている。ウィルキンソンは主として文体面の影響と登場人物の生き方の共通性を指摘して、次のように述べている。

On both a stylistic and thematic level the stories in *A Sportsman's Sketches* foreshadow much of what Hemingway would do in his own short fiction seventy further on — one witness the same concern for, and love of, landscape and terrain; the same exactness and subtlety of natural description to evoke complex emotional states; the same empathy for simple people who have not yet entirely lost connection with place; and, finally, the same pathos connected with a simpler, more integrated past. (Wilkinson 27-28).

ウィルキンソンが指摘するように、ヘミングウェイの文学世界にツルゲーネフ

の影響の痕跡が見られることは疑いようがない。しかしながら、ウィルキンソンはツルゲーネフの『獵人日記』の政治的インパクトをどうやら見落としているようである。『獵人日記』は、農奴制度下で、ロシア農民の高貴な生き方を伝えることによって、逆に農奴制がいかに人間の尊厳を踏みにじるものであるかを明らかにしている。出版された当時まだ皇太子であったアレクサンドル2世はこの本を読んで、農奴制度を廃止させる決意をしたといわれている。農奴を支配する地主と比較して、農奴のより豊かな精神世界が描かれることによって、農奴制度の矛盾が明らかになるからである。⁴

ツルゲーネフが農奴制度廃止を意図したものでないにせよ、結果的にこの作品は農奴解放を促すという政治的インパクトの強い作品となった。ジェイクは階級に関しては敏感で、たびたび階級に関する言及を行っていることを考えれば、この作品の歴史的意味を理解していた可能性は高い。

Ⅲ 植民地支配

(1) エチオピア戦争

ミピポラス伯爵は、戦争で受けた、矢が貫通した肋骨の下の傷跡をブレットとジェイクに見せながら、その傷がアビシニア（現エチオピア）に出張中に負傷したと述べている（*The Sun Also Rises* 60）。この戦争は、ミピポラスの年齢を考慮に入れると、19世紀末の第一次エチオピア戦争を指していると考えられる。この戦争は他のヨーロッパ諸国に比べて植民地化に出遅れたイタリアがエチオピアを植民地化する目的で、侵略した戦争である。ジェイクと伯爵のさり気ない会話の中にも植民地主義の問題を忍ばせている。

(2)大英帝国内部の問題

(A) アイルランド問題

マイクは、勲章の話をしながらか、イギリスの元帥ヘンリー・ウィルソン暗殺へ言及している（*The Sun Also Rises* 135）。ヘンリー・ウィルソンはアイルランド独立を目指すシン・フェイン党弾圧を主張し、そのせいで、逆に1922年シン・フェイン党员によって暗殺されている。同年アイルランドは独立を果たすが、アイルランドのある島の一部は未だにイギリス領のままである。ウィルソンへの言及によって、イギリスが決して一枚岩ではなく、分裂していることを示しているし、イングランドによるアイルランド支配の問題を仄めかしている。

(B) スコットランド問題

スコットランド人のマイクは、イングランドを嫌悪する（*The Sun Also Rises* 180, 188）。これは1707年イングランドがスコットランドを併合して、大ブリテン王国を作ったことが未だに尾を引いていることを示している。ケルト系スコットランドとアングロ・サクソン系のイングランドの間には根深い確執があることを窺わせる。

IV アメリカ批判

ビルが生まれた国との接触を失っていると批判するように、ジェイクはアメリカ社会からの離脱者である。離脱の理由はあまり明らかにされていないが、ジェイクがカトリック志向であり、アメリカを支配するプロテスタントがその倫理と生活様式をアメリカ国民全体に強制しようとする社会情勢（禁酒法や移民制限法などの制定）に対する反発が理由であると考えられる。ジェイクはアメリカの価値観に懐疑的であり、当然アメリカに対しては批判的である。

(1)アメリカン・ドリーム

ユダヤ人の裕福な家庭に生まれたコーンは世間知らずで、W・H・ハドソンの『パープルランド』のような空想小説を真に受けてしまう。ジェイクはそれを、世俗の世界から隔離されたフランスの修道院から、アメリカのサクセス・ドリームを売り物にしたホレイショ・アルジャーの本を持ってウォール・ストリートへ出て行くようなものだと批判する (*The Sun Also Rises* 9)。経済的に豊かなバックグラウンドを持つコーンに対する嫉妬があるとはいえ、ジェイクは、コーンの未熟さ、視野の狭さを批判している。しかし、一方でホレイショ・アルジャーの『ぼろ着のディック』に代表されるサクセス・ドリームを謳ったイデオロギーとウォール・ストリートに象徴される資本主義をも批判しているのである。⁵『日はまた昇る』出版の前年1925年「アメリカの夢」をテーマにした『アメリカの悲劇』と『偉大なギャッツビー』が出版されている。『アメリカの悲劇』では少なくとも「アメリカの夢」というイデオロギーが批判されている。このイデオロギーを信じることによって、クライド・グリフィスのような犠牲者が数多く生まれてくるのは明らかである。ヘミングウェイもここでドライサーに込めていると考えてもいいだろう。無責任に成功の夢に駆り立てるアメリカ社会を批判している。

さらに「アメリカン・ドリーム」批判は続く。イラチ川にフィッシングに行った時ビルと酒を飲んだ後で、二人とも少し昼寝した後で、夢を見たか、見なかったかという議論になり、ビルはジェイクに夢を見るべきだと諭しながら、夢を実現させた人物名として4名列挙している。

まずヘンリー・フォードは、デトロイトの自動車会社の技術主任を辞して、自らフォード社を設立し、1908年T型フォードを発表、ベルトコンベヤー式の組み立てで生産の効率を上げ、大幅に売り上げを伸ばしたため、アメリカン・サクセス・ドリームの体現者となった。⁶

ジョン・カルヴィン・クーリッジは、保守的で実業界寄りの政策を実行し、

繁栄の時代（1923-29）の（第30代）大統領であった。プロテスタントで、勤勉、節約、正直などの倫理を実践してきたという意味で、フランクリンとホレイショ・アルジャー的価値観の体現者である。クーリッジのモットーは、"To spend less than you make, and to make more than you spend"（高崎 181）であり、節約の倫理がよく表れている。クーリッジは、第一次世界大戦後の繁栄にのって、実業界寄りの政策をとっただけで、革新的なことは行わなかったという意味で、歴史家の評価はかなり低い（高崎 viii）。ビルとジェイクは頑迷なプロテスタントであることとバブルの時代に乗っただけで、無能なクーリッジの政治能力を揶揄している。

ジョン・デヴィッドソン・ロックフェラーは行商人の家に生まれ、農産物の仲買人から石油業に進出し、オハイオ・スタンダード石油社を設立し、製油業の90%以上を支配するようになった。ロックフェラーもフォードと並ぶアメリカン・サクセス・ドリームの体現者である。

ジョー・デヴィッドソンは、彫刻家で、いわゆる実業的な成功のアメリカの夢とは無縁であるが、芸術家として名声を上げているため、夢の実現者としてビルは名前を出している。ここに挙げられた4人には、勤勉・正直などのプロテスタント的美徳を重ねることによって、成功したという共通点がある。

禁酒法は増え続ける移民によって、アメリカ社会が変貌することを防ぐとともに、プロテスタントの倫理に基づく「古き良きアメリカ」を守るために施行された法律であるが、ビルとジェイクはアメリカ本国の情勢を知りながら、飲酒していることを考えると、ビルもあまり真剣にサクセス・ドリームを信じているわけではないだろう。その前にもアナトール・フランスの "irony and pity" (*The Sun Also Rises* 113) にも言及していることから、皮肉と憐れみをもって、これらの4人にある一定の距離を置いていることだけは確かである。前に述べたように、ジェイクはホレイショ・アルジャーの成功物語を批判しているくらいだから、少なくともビルのことばを文字通りに受け止めてはいない。

(2)金銭万能主義

ブルゲーテへ向かうバスの中で、ジェイクはバスク人と思われる老人から話しかけられる。その老人は以前アメリカに住んでいたことがあり、アメリカ人に親しみを感じていたのであろうが、ジェイクに今飲んでいるワインについて、"You can't get this in America, eh?" と話すと、ジェイクは "There's plenty if you can pay for it" (*The Sun Also Rises* 107) と答える。自嘲気味であるが、アメリカにはびこる物質文明、金銭万能主義を批判している。

(3)合理主義

アフシオナードとは一般には「闘牛愛好者」の意味であるが、この小説では、「闘牛の真の理解者」の意味で使われている。アフシオンをもっているかどうかは、控えめな、遠回しの問いによる、ある種の精神的口頭試問によって確かめられる (*The Sun Also Rises* 132) とジェイクは説明する。神秘的なものであるがために、ジェイクがアメリカ人でありながら、アフシオナードであることが珍しいと多くのスペイン人のアフシオナードが考える。これは逆に合理主義・物質主義のアメリカ人というステレオタイプ化がスペイン人の間に広まっていることを示している。

(4)アメリカ大使

アメリカ大使がロメロに会いたがっているが、どうしたらいいのか、モントーヤはジェイクに尋ねる (*The Sun Also Rises* 171-72)。20世紀に入って、経済大国となったアメリカの大使ともなれば、駐在する国に対して、ある程度の権力の行使は許容されると考え、有望な闘牛士を呼びつけることくらい容易いと考えているふしがある。実際はそのような権力者に会うことによって、甘やかされて墮落して行く闘牛士をこれまでに見て来たモントーヤとジェイクはアメリカ大使との会見を無視することで意見が一致する。

(5)プロテスタント

(A) KKK

ジェイクとビルはスペインへ向かう列車の中で、アメリカから来たカトリック人の家族と話しあう中で、食堂車がオハイオ州デイトンから来たプロテスタントの巡礼者のグループに占領されてしまったことを嘆く。ビルはそのグループの牧師に皮肉まじりに、"When do us Protestants get a chance to eat, father?" (*The Sun Also Rises* 88) と尋ねるが、牧師にはビルの皮肉が通じず、ビルは "It's enough to make a man join the Klan" (*The Sun Also Rises* 88) と嘆く。ビルはもちろん冗談で言っているのであるが、クー・クラックス・クランの思想が白人・アングロサクソン・プロテスタント (WASP) 中心であることを考えると、あながち冗談と片付けられない。クー・クラックス・克蘭に入った方が暮らし易いということで、逆に 1920 年代のアメリカではクー・クラックス・克蘭の人種・宗教差別的暴力が行使されていたことを示している。クー・クラックス・克蘭は南北戦争後に誕生した人種差別的秘密結社で、1870 年代に一度は消滅したが、第一次世界大戦中に復活し、戦後急成長していった。ジェイクがパリで暮らしている頃は、KKK は、攻撃のターゲットを黒人に限定せず、アジア系、ユダヤ系、カトリックなどにも拡大し、アメリカで勢力を伸ばして行った時期である。

(B) 進化論論争

昼食の中身に鶏肉と玉子が入っていたことから、ジェイクとビルの会話は、玉子が先か、鶏が先かの議論になり、進化論に反対したウィリアム・ジェニングス・ブライアンにビルが言及し、ジェイクは昨日新聞でブライアンの死を知ったと語る。1859 年チャールズ・ダーウィンが『種の起源』で、聖書の天地創造説を否定する進化論を発表し、当時の西洋社会では、大きな反響を引き起こした。人間は神の被造物であるというキリスト教の教えに反するだけでなく、

結果的に魂の永遠性なども否定することになるからだ。1925年テネシー州議会では、進化論を学校教育で教えることを禁止したが、1925年ジョン・スコプスという生物教師が進化論を教えて、7月に裁判になり、その時検事となったのが、国務長官を務め、大統領候補にもなったことがあるブライアンであった。ブライアンは、聖書の教えを文字どおりに信じるいわゆるプロテスタント根本主義者で、また禁酒法にも反対したことで知られているが、玉子が先か、鶏が先かの論争から、死者を吊いながらも、ビルとジェイクはブライアン (*The Sun Also Rises* 121) を皮肉る。

(C) 禁酒法

ジェイクとビルにとって、進化論とともに頑迷なプロテスタンティズムを表しているのが禁酒法である。ブルゲータヘ向かう列車内でカトリックのアメリカ人家族と話し合った際にも、アメリカ人の夫人が禁酒法には反対票を投じたと言っている。その後、前述したように、ドレッド・スコット判決が反酒場同盟によって仕組まれていたとビルは冗談交じりに語る。さらに、酔ったまま、ジェイクは憲法修正第18条に署名したウェイン・B・ホイーラーとノートルダム大学に通ったとジェイクが言うと、ビルはオースティン・ビジネス・カレッジと一緒に通ったと言い出す始末である。ジェイクもビルもホイーラーと大学の同級生になる年齢（ホイーラーは1869年生まれで、おそらく30歳近い開きがある）ではないし、ホイーラーはウエスタン・リザーブ・ロー・スクール出身で、ノートルダムにもオースティン・ビジネス・カレッジにも行っていないので、酔っ払った上でのジョークとわかるが、ここでホイーラーを話題にするのは、禁酒法の制定に大きな力を発揮したからだ。もともと禁酒法にはプロテスタントのモラルが大きく働いている。つまり、「キリストが再臨する土地は墮落したヨーロッパではなく、無垢の新大陸」である（岡本32）と信じていたプロテスタントの理念を禁酒法によって、実現させようとしたのである。ま

た暴力、売春、貧困と結びついた飲酒という習慣を世の中から追放することと飲酒の背後に聳える巨大な酒造業界を攻撃することもその目的であったが、その裏には、WASP 以外の移民が増加する状況で禁酒法を通して民族的・宗教的に異質な人々を統制し、プロテスタントの文化への同化を強化することが目的であったのも事実である。自称カトリックのジェイクは、禁酒法に反対し、ヨーロッパで酒を飲む毎日を過ごしているのも無理はない。

ビルは、どこまで本気なのかはわからないが、同性愛の問題と絡めながら、黒人奴隷の合衆国憲法上の地位を争った訴訟として知られるドレッド・スコット判決（ミズーリ州に住んでいたドレッド・スコットが、イリノイ州という自由州に移り住んで解放を求めたのに対し、1957年米最高裁が黒人奴隷は所有物であり市民ではないと却下した判決）が反酒場同盟によって仕組まれたと語る（*The Sun Also Rises* 116）。禁酒法が白人プロテスタントの倫理を他の民族、宗教の信者に強制することが目的であったので、人種/民族・宗教的差別が禁酒法の根底に存在したことを考えると、これを酔っ払いの戯言と片付けるわけにはいかないだろう。また反酒場同盟の思想が本質的には KKK と同質であることがわかる。

結論

本研究では、『日はまた昇る』という小説のアメリカ国内におけるユダヤ人と黒人の差別問題、階級（あるいは爵位）、ロシアの農奴解放とアメリカの黒人およびネイティブ・アメリカン、植民地問題、アメリカの夢というイデオロギー、反進化論と禁酒法に見られる頑迷なプロテスタンティズム支配の問題などを見てきた。

『日はまた昇る』は、1926年に発表されていて、約80年が経過しているが、21世紀に入っても決して古びない問題を提示している。たとえば、1999年カ

ンザス州教育委員会は、進化論を教えることを禁止することにした。ヘミングウェイが80年前にすでに時代遅れと認識していた問題が、アメリカ社会では未だに解決していないことを示しているのである。

最後に、コーンに対して、ブレット、ビル、ジェイクは価値観を一つにする¹と看做されがちであるが、ジェイクが差別や支配の問題を意識していた点で、ブレットやビルと必ずしも同じ価値観を持っているわけではないことも明らかになった。

『日はまた昇る』は政治的プロパガンダを目的とした小説ではないのだが、ジェイクの目を通して1920年代のヨーロッパとアメリカの政治・経済・社会の諸問題が描き出されており、ヘミングウェイの政治意識が見えてくるだろう。

注

1. スヴォボダは、黒人のドラマーが歌う曲名については、"He is singing the "Aggravatin' Papa (Don't You Try to Two Time Me)" by Roy Turk and J. Russel Robinson" (Svoboda 106) と特定している。
2. スクリブナーズ版の64ページ4行目 "You can't two time----"の部分はマニュスクリプトではそのままであるが、上に "Me and My Boy Friend" (*Facsimile Edition* 204-5)と書き加えられている。またスクリブナーズ版でその次の "....."の部分は、マニュスクリプトでは "My boy friend and me" (*Facsimile Edition* 205) となっており、次の二つの "....." は、マニュスクリプトではクォーターション・マークにはさまれた点線のない空白だけとなっている。
3. ゼリの店で演奏されていた音楽がどのようなものであったかははっきりしないが、ディキシーランド・スタイルからスウィング・スタイルへの過渡期であったと考えられる。ジャズはヨーロッパに紹介されて間もないし、現在

のようにマス・メディアが発達せず、情報の流れがゆったりしていたので、ヨーロッパでは、アメリカから輸入されたエキゾチックな音楽として受け入れられたのではないだろうか。

4. 川端香男里は『獵人日記』について

この作品は一大センセーションをまき起こし、これを読んだ当時の皇太子、後のアレクサンドル二世に農奴解放の必要性を痛感させたと言われる。この作品はさまざまな主題をもつ短篇の集大成であるが、いずれも地主貴族である「作者」が狩猟に出た時の農奴たちとの出会いをスケッチ的に描いている。農奴たちは人間味あふれる、知的な、想像力豊かな「肯定的」人間として描かれ、あまり魅力のない存在である地主がそのようなすげれた「ドゥーシ」（魂、農奴の両方の意）を所有することが正義と言えるかという疑問を読者はごく自然に抱くようになる。この点こそ、美しい自然描写、洗練された文体とともに、この作品を「詩で綴られた農奴制に対する告発状」（ゲルツェン）としたのである。（川端 221-222）

と述べている。同じく川端編集の『ロシア文学史』では、この作品について次のように記されている（執筆者名は特定できない）。

ロシア社会の底辺部を批判的に描くことは、当時のいわゆる自然派作家に共通の志向であったが、トゥルゲーネフの作の特徴をなすのは、その冷静な抑制された筆致である。一獵人という正確な観察者の視点から、農奴や地主たちの会話、生活、その個性や世界観が描写される。作者の感慨や批判の念は声高には述べられないが、農民たちの豊かで詩的な内面生活の描写が、それ自体彼らを粹付けている社会制度の矛盾を雄弁に

語っている。作品の心情的流れを流麗な自然描写で代弁する彼に特徴的な手法も、この作品集で完成されたものであった。(川端編『ロシア文学史』 168)

また井桁貞義はこの作品を「ロシアの『アンクル・トムの家』」と紹介している(『はじめて学ぶロシア文学史』188)。

5. アメリカ国内のことではないが、マイクの破産は資本主義の負の側面を逆に映し出していると考えられる。
6. 佐藤唯行によると、フォードはミシガン州デトロイト近郊の『ディアボーン・インディペンデント』紙を買収して、その新聞を通じて、1920年から27年まで反ユダヤ人キャンペーンを張った。フォードの考え方はヒトラーにも影響を及ぼしたという。ユダヤ人側もフォード車の不買運動で対抗し、フォードは最終的に謝罪することになった(佐藤『迫害史』94-123)。ただしビルとジェイクの会話でこのことが強く意識されていたわけではないようである。ジェイクは中西部(カンザス・シティ)出身という設定であり、ヘミングウェイもイリノイ州出身で、ミシガン州にもよく出かけていたから、フォードの反ユダヤ主義を知っていた可能性は強いが、ジェイクやビルの反ユダヤ的態度を見る限り、このことを意識していたようには考えられない。というのも、反ユダヤ主義のフォードをからかう必要はないからだ。

参考文献

Hemingway, Ernest. *A Moveable Feast*. New York: Charles Scribner's Sons, 1964.

----- *The Sun Also Rises*. New York: Charles Scribner's Sons, 1970.

----- *The Sun Also Rises: A Facsimile Edition Part One*. Ed. Matthew J.

- Brucoli. Detroit: A Manly Book, 1990.
- Oliver, Charles M. *Ernest Hemingway A to Z: The Essential Reference to the Life and Work*. New York: Facts on File, Inc., 1999.
- Reynolds, Michael S. "The Sun in Its Time: Recovering the Historical Context." *New Essays on The Sun Also Rises*. Wagner-Martin, Linda. Ed. Cambridge: Cambridge University Press, 1987, 43-64.
- Wilkinson, Myler. *Hemingway and Turgenev: The Nature of Literary Influence*. Ann Arbor: UMI Research Press, 1986.
- 岡本勝 『アメリカ禁酒運動の軌跡：植民地時代から全国禁酒法まで』 ミネルヴァ書房, 1994.
- 川端香男里 『ロシア文学史』 岩波書店, 1986.
- 川端香男里編 『ロシア文学史』 東京大学出版会, 1986.
- 佐藤唯行 『アメリカのユダヤ人迫害史』 集英社, 2000.
- 『アメリカ・ユダヤ人の経済力』 PHP 研究所, 1999.
- 首藤理彩子 「馬車からクルマへ：『日はまた昇る』の "Rolling" Twenties」
『ヘミングウェイ研究』 第4号 (2003), 1-11.
- 高崎通浩 『歴代アメリカ大統領総覧』 中央公論社, 2002.
- ツルゲーネフ、イワン・セルゲーヴィッチ 『獵人日記』 工藤精一郎訳 新潮社, 1979.
- 広瀬隆 『アメリカの経済支配者たち』 集英社, 1999.
- 藤沼貴、水野忠夫、井桁貞義編著 『はじめて学ぶロシア文学史』 ミネルヴァ書房, 2003.